

## 名古屋大学博物館特別講演報告

### 榎本武揚が見た露清関係とモンゴル — 『シベリア日記』を中心にして

The report of Nagoya University Museum special lecture:  
Russo – Qing relations and Mongolia that Enomoto Takeaki observed,  
based on the analysis of Enomoto's diary “The diary in Siberia”

醍醐 龍馬 (DAIGO Ryuma)

大阪大学大学院法学研究科博士前期課程  
Graduate School of Law and Politics Master's Program, Osaka University

本稿は、名古屋大学博物館で開催された『大モンゴル展』の一環として2012年6月16日に催された特別講演「榎本武揚が見た露清関係とモンゴル—『シベリア日記』を中心にして」の要旨である。

#### はじめに

榎本武揚という名を聞いてモンゴルや露清関係といったキーワードを連想する者はまず居ないと思われる。しかし、明治初期において露清国境を観察しながら、既に両国に併合され国家が消滅していたモンゴルに注目した日本人がいた。その人物こそが榎本武揚である。1878年、榎本は馬車によるシベリア横断旅行を実行したが、その際に露清両国のみならず、モンゴルの調査まで行っていた事実は注目されていない。本稿では、二ヶ月以上に及ぶ榎本のシベリア横断旅行を『シベリア日記』の記述と関連する他史料の分析を通じて検討し、榎本が見た当時のモンゴルと露清関係を明らかにしたい。



図1 海軍中将大礼装の榎本  
(榎本隆充氏蔵)

#### 露都での活躍

榎本は、箱館戦争で新政府に徹底抗戦した「提督」として有名であるが、戦後その才能を買われて明治政府に登用された。特に、語学や国際法に通じた榎本は「外交官」として期待されることとなる。最初の舞台となったのが、日露外交であった。幕末以来、日本は雑居地樺太をめぐる日露領土問題に頭を悩まされてきた。そこで新政府は、榎本を特命全権公使としてロシア帝国の首都サンクトペテルブルクに派遣し、領土交渉をさせた。同時に、当時日本とペルーの間で国際紛争化していたマリヤ・ルス号事件の解決をロシア皇帝の仲裁に委ねることに決定した日本政府は、ペテルブルクにおける裁判の進行についても榎本に託したのである。本件は日本が直面する初めての国際仲裁裁判であり、榎本に寄せられる期待は大きかった。

1875年5月7日、榎本は難航する領土交渉をロシア側との間にまとめ、樺太千島交換条約を締結した。本条約によって樺太をめぐる幕末以来の日露領土問題は解決され、日露関係は好転した。さら

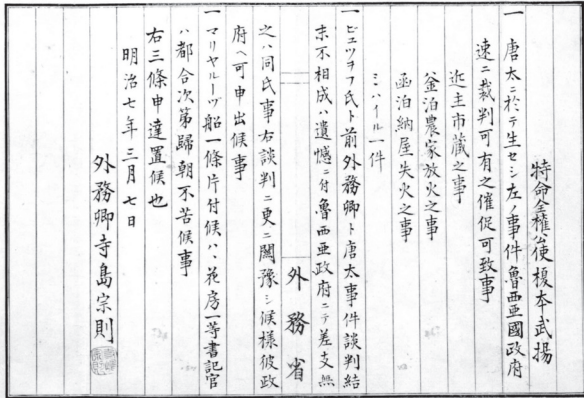


図2 榎本に下された訓令（榎本隆充氏蔵）

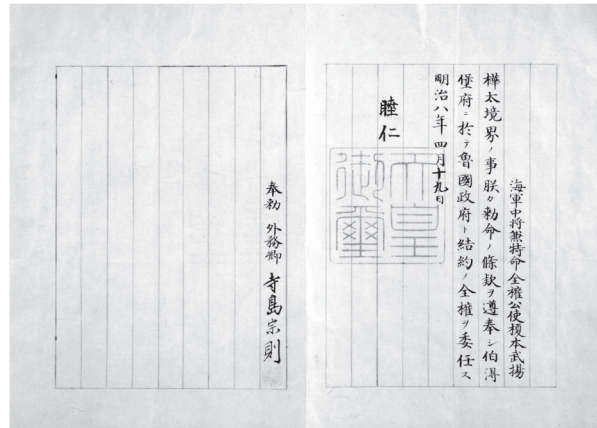


図3 榎本に下された条約締結の全権委任状（榎本隆充氏蔵）

に、榎本は領土交渉と並行して展開されたペルーとの国際仲裁裁判においても巧みな裁判手続きを展開し、ロシア皇帝から見事完全勝訴の判決を勝ち取り日本の国際的威信を大いに高めたのである。

### シベリア横断の全貌

ロシアでの役目を終えた榎本は、帰国の経路に一般的な海路ではなく陸路を選ぶ。その第一案としてシベリア経由での帰国を考えた。樺太千島交換条約を締結し日露友好に貢献した榎本としては、ロシア全土を視察することでロシアに日本への敵対心がないことを確認し、日本人の恐露病を覚ましたかったようである。ただ当時の英露対立を危惧した榎本は、ウラジオストック港を英艦隊に封鎖された場合に備えて第二案の帰国経路も考えていた。中央アジアを経た後、図4のようにキャフタからウランバートル、ゴビ砂漠を経て日本にまで帰るといものである。このことは、1878年4月5日に榎

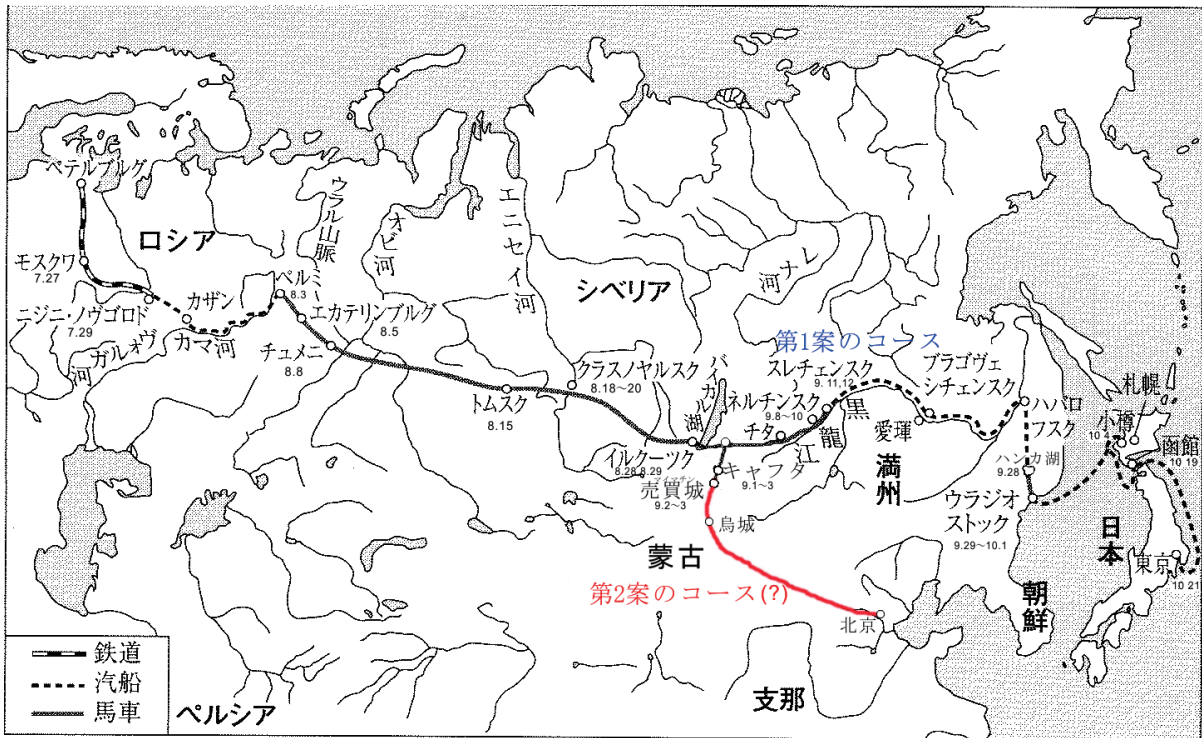


図4 榎本武揚シベリア横断図（講談社，2008）を加筆修正

本が妻に宛てた書簡から窺える内容である。しかし、結果的には英露対立が沈静化したため、第一案を採用するに至った。

旅行は、図4に示したように、露都ペテルブルクからモスクワ、イルクーツクを経てウラジオストックに向かい、その後、日本に帰国するという長旅であった。未だシベリア鉄道が開通していない当時、旅行は列車、馬車、船で行われた。最も長距離にわたって利用したのが、図5のようなタランタス（тарантас）と呼ばれるロシアの馬車であった。同行者三人を含む榎本一行は、二台のタランタスに分乗した。揺れの激しいタランタスについて榎本は、まるで「拷問道具」のようだと記録しており、時には横転事故に見舞われることすらあった。加えて、道中では南京虫の襲撃でよく眠ることもできず、実に困難を極める旅路であった。

途中、榎本はその知的好奇心をもってシベリアの風土、資源、動植物、人口、軍隊、食べ物、物価、地質、言語などを多岐に亘って調査した。実際に、各所において気温測定、物価表作成、砂金採掘場や博物館の見学などに取り組んでいる。また図6は、榎本による地層の解説付きスケッチであり、その地質学的知見の高さを窺わせる。ロシア政界に強力なパイプを持つ榎本は、ロシア側の手厚い配慮によって行く先々で歓待を受け、シベリアの大地を隈無く観察することができたのである。

表1 榎本武揚のシベリア横断 概略

時期	1878年7月26日～9月29日
出発地	ペテルブルク
到着地	ウラジオストック
乗り物	タランタス2台
走行距離	約11000km
榎本の身分	初代駐露公使、海軍中将
メンバー	榎本武揚、寺見機一、市川文吉、大岡金太郎
目的	日本国内の恐露病対策、学問的好奇心
日記	『シベリア日記』（ただし、榎本の存命中には公開されず。）
調査内容	政治、外交、地質、経済、言語、地誌、軍事など多岐にわたる。
旅行の評価	旅行自体が知られず。

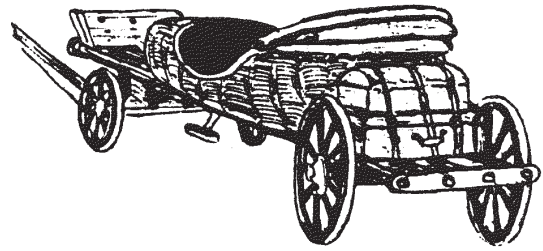


図5 タランタス (Л.В. Беловинский. 2003)

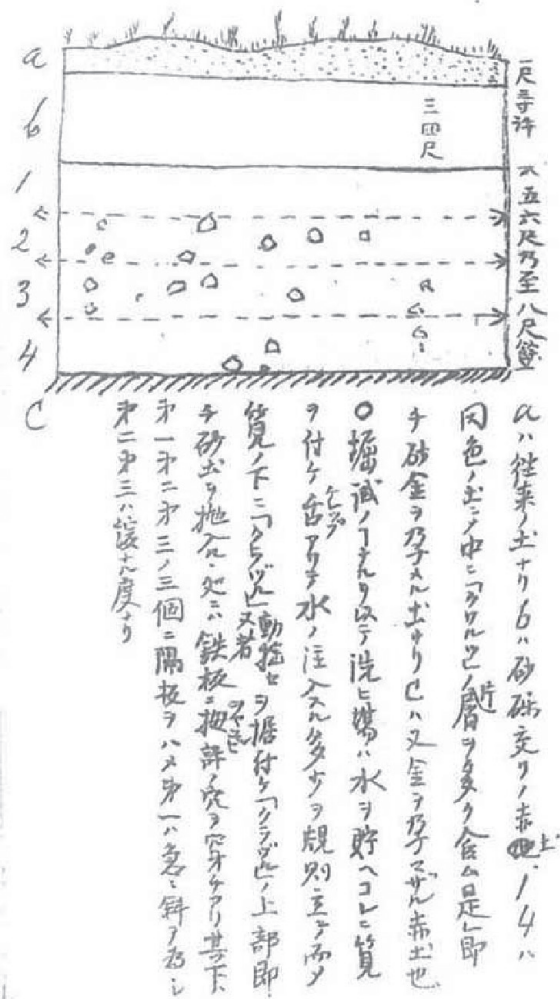


図6 「シベリア日記」, 8月6日条 (国立国会図書館蔵)



## 露清国境の観察

16世紀以降、ロシアがシベリアへ東方進出するにつれて露清間の対立が始まった。露清間では各地で国境画定が進み、19世紀にはアイグン条約（1858年）や北京条約（1860年）などが締結され、清国側がロシア側に押され気味になっていた。榎本がシベリア横断した1878年とは、まさにこのような時期である。

8月30日にシベリアの都市イルクーツクを後にした榎本は、そのまま東に向かうのではなく露清国境まで南下し、9月1日にロシア側のキャフタ、9月2日には越境して清



図7 清朝末期のモンゴル（宮脇，2002）

国側の売買城を訪れるのであった。1727年にキャフタ条約が締結されて以来、両都市間では交易が行われていた。榎本は当地において展開されるロシアの毛皮と清国の茶による露清交易の実態を観察すると同時に、将来的な日露交易の可能性をも模索するのである。また、榎本はロシア人と清国人の様子を観察することで、形式上の国交はあるものの互いにぎくしゃくする露清関係を体感した。9月2日の日記には、露清間に「隣交あるいは交誼などの相存することなきを知れり」とある。なお、榎本は旅行を通して比較的開化しているロシアに好意的な印象を持っている反面、非開明的で国境警備をも軽視する清国の将来には悲観的であった。

表2 露清関係年表

年	事件	内容
16世紀後半	ロシアのシベリア東進が始まる。	露清間の対立が始まる。
1689年	ネルチンスク条約	スタノヴォイ山脈からアルグン側にかけての領土画定。黒竜江流域は清国に帰属。
1727年	キャフタ条約	モンゴル方面での国境画定。キャフタ（ロシア側）と売買城（清側）で貿易開始。
1755年	モンゴル滅亡	清の乾隆帝によりジュンガルが滅ぼされる。
清国の弱体化，ロシアの東方進出が積極化。		
1858年	アイグン条約	ネルチンスク条約の修正。黒竜江を新たな国境線にして同江以北をロシア領，ウスリー江以東の沿海州を共同管理にすることに決定。
1860年	北京条約	ロシアはウスリー江以東の沿海州を獲得し，ウラジヴォストーク港を建設する。
1871年	イリ事件	ロシアがイスラム教徒の反乱につけこみイリ地方を占領する。
1878年	榎本武揚が露清国境を通過。	
1881年	イリ条約	清国はザイサン湖周辺地方をロシアに割譲して賠償金900万ルーブルを支払い，ロシアはイリ地方を清国へ返還した。

## モンゴルの調査

榎本は露清国境で両国間の交易を観察するだけでなく、両国に属する種々の少数民族にも注意を払い、特にロシア側ではブリヤート人、清国側ではモンゴル人に関心を抱いた。この時代のモンゴルは既に露清両国に併合されており、モンゴル系民族は両国に分かれて住んでいた。榎本はブリヤート人とモンゴル人の違いの有無について人種、言語、宗教などの観点から現地調査を始める。その過程で、ブリヤート人はロシア化が進み髪型や家屋などの生活習慣がモンゴル人とやや異なるものの、基本的には両者が同一民族であり、話す言語もほぼ同じであることを確認する。同時に、露清両国で苦しい生活を強いられているこれらの人々を目の当たりにすることで、国を失った民族の行く末をまざまざと体感するのだった。そして、日本人と顔立ちが似ているこれらの民族に榎本は比較的あたたかい眼差しを向けている。

また、榎本は露清交易を観察するために、9月2日に露清国境を越境し「支那領売買城に入」っているが、これは即ち現在のモンゴル領にまで足を踏み入れたことをも意味する。国境付近では、モンゴル人の家を見つけ実際に中に入って住人と会話まで交わしている。このとき榎本が訪問したのは、ゲルと呼ばれる図8のようなモンゴルの伝統的家屋であった。また、ウルガ（現ウランバートル）への関心からその写真を探し求めている様子や、かつての皇帝チンギスハンへの興味なども窺える。9月3日には、モンゴル人のラマ僧に出会い会話をした。日記には、モンゴル人種が露清両国に組み込まれて今日の姿になったことを嘆く彼の様子が描かれている。そして、最も注目すべきが9月5日の日記



図8 名古屋大学博物館前に展示されているゲル

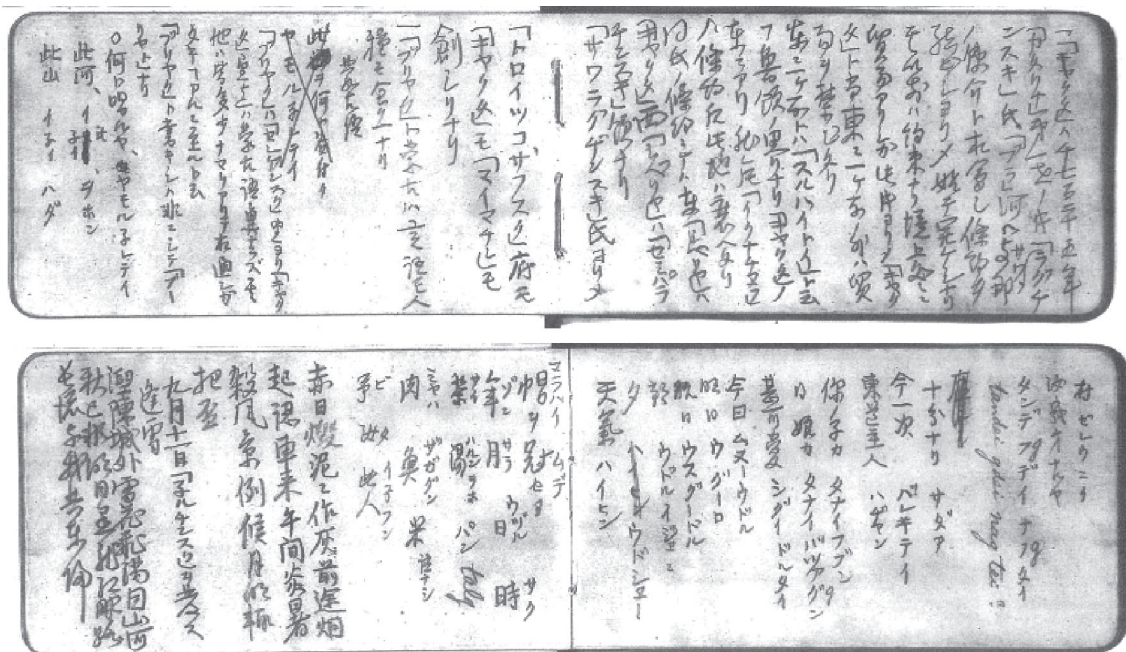


図9 「シベリア日記」、9月10日条（国立国会図書館蔵）

内容である。この日の榎本は、夕食後にブリヤート人を呼び寄せて、その言語について質問し簡単な日本語－モンゴル語対比表を作成しているのである。図9は現史料であり、表3はそれを分かり易く活字化したものである。榎本は、オランダ語、フランス語、英語など数多くの言語を使いこなしたが、モンゴル語にも関心を抱き熱心に現地調査していたのである。

また車中では、ロシア人探検家が記したモンゴル関連の書物を読んで予習していた。たとえば、モンゴルの地理に関する記述についても、事前知識と現地調査との照合をした上でなされている箇所が度々出てくる。さらに日記からは、榎本が聞き取り調査を実行するのみならず、カメラや望遠鏡、科学実験器具など多種多様な道具を携帯しながら調査旅行していたことが分かる。このように榎本のシベリア、モンゴルへの関心は、

決して行き当たりばったりのものではなかったのである。これらを踏まえると、榎本こそがモンゴルに注目して本格的に現地調査をした最初の日本人であった可能性が高いと言えよう。

表3 榎本が作成した日本語－モンゴル語対比表

何ト唱フルヤ	ヤモルネレテイ
この河	イネイ ラホン
この山	イネイ ハダ
村	ゼレウニク
汝幾オナルヤ	タンデ フデイ ナフタイ tandeigdei nag tei?
十分ナリ	サダア
今一次	バレキテイ
東道主人	ハヂヤン
你ノ子カ	タナイフブン
同 娘カ	タナイバツァグン
はなはだ愛すべし	シグイ ドルタイ
今日	ムヌーウドル
明日	ウゲーロ
昨日	ウスゲードル
朝	ウドルイジェニ
夕	ウドシェー
天気	ハイヒン
帽ヲ冠セヨ	マラハイムデ
年	ゾニ
月	サラ
日	ウヅル
時	サク
茶	サイ
湯	ハルンヲホ
パン	talg
肉	ミヤハ
魚	ザガゲン
米	語ナシ
予	ビ
汝	タ
この人	イネフン

### おわりに

本稿では、主に榎本武揚の『シベリア日記』の分析を通じて、交易をしつつも互いにぎくしゃくする露清関係の状況と、国家が存在しない時代のモンゴルの実情を垣間見た。規定コースからそれてキャフタ、売買城まで南下し露清国境を観察した榎本の道草は、シベリア横断が単なる帰国の手段ではなかったことの表れでもある。また、ロシアと清という国家単位にとどまらずシベリアの少数民族にまで目を向けているのが『シベリア日記』の大きな特徴だが、中でもモンゴル系民族に大きな関心を抱いているところが注目に値する。榎本の記録からは、露清両国に併合され苦しい生活を強いられている彼らの姿が生々しく浮かび上がる。榎本の目には、二大強国に挟まれ消滅したモンゴルと、列強との関係で苦しむ小国日本とが重なったのかもしれない。露清関係についてもモンゴルについて

も、書籍等で調べるだけでなく、高官にも拘わらず実際に現地にまで出向いて確認し、専門用語を使いこなしながら正確に記録したことが榎本の特筆すべき点である。まさに榎本は、明治政府における第一線の「外交官」であると同時に、博学多彩な「学者」の顔も持ち合わせていたのである。本稿を基にした論文の発表は他日に期したい。

#### 【参考文献】

- 加茂儀一（1969）資料 榎本武揚，新人物往来社，418P.
- 講談社編（2008）榎本武揚 シベリア日記，講談社，360P.
- 諏訪部揚子，中村喜和（2010）現代語訳 榎本武揚 シベリア日記，平凡社ライブラリー，333P.
- 醍醐龍馬（2011）外交官榎本武揚と樺太千島交換条約—交渉とその評価—。まちかね法政ジャーナル，1，大阪大学法学会，1-24.
- 醍醐龍馬（2012）マリア・ルス号事件をめぐる国際仲裁裁判—日本初勝訴への道—。まちかね法政ジャーナル，2，大阪大学法学会，1-31.
- 宮脇淳子（2002）モンゴルの歴史，刀水書房，295P.
- Л.В. Беловинский. (2003) *Энциклопедический словарь российской жизни и истории, XVIII – начало XXв.* Москва, «Олма-пресс», 912 стр.

(2012年10月15日受付)